

平成 29 年度 東京藝術大学大学院 美術研究科 先端芸術表現専攻 修士課程
入学者選抜試験 第 1 次試験問題

問題

そもそも芸術は教えることはできるのか。このような根源的な問いへは芸術の高等教育に携わる教員の数だけ答えがあるのかもしれない。そしてこれは裏返せば貴方達、芸術を志す受験生から発せられるかもしれない。

「学生はこの大学で何を教わるのか、あるいは教わらないのか、何を得るのか、あるいは得ないのか」というような問題意識とも繋がっていくだろう。もし、貴方がこの大学院に入学したとすれば、芸術大学という場で大学の教員は教える側、貴方は教わる側として出会い、二年間という時間を共有することになる。しかしこの二年間のカリキュラムを終え、あなたが芸術修士となったとしても、芸術を伝授され何かを得たことになるかは自明のことではない。芸術は一人でも続け、発展させることもできるが、貴方は芸術大学という組織に入学することを選択しようとしている。ここで貴方は何をどのように学び、または学ばないのか、何をどのように得、または得ないのか、そして、それはあなたの人生のビジョンにどのように関係していくのか。

できるだけ具体的に書いてください。

※この問題用紙は試験終了後に回収します。

※問題の記述にあたっては縦書きで書くこと。

※文字数は 1000 字以内とする。

※英文による回答も可。回答用紙の裏面を使い、400ワード程度で回答してください。

You may write in English. (about 400 words; use the blank of the sheet; write in clear hand-writing)

以下、かつて東京芸術大学に招聘教員として在籍した、ドイツの著名なメディアアーティスト、インゴ・ギュンターの文章を一つの例として参考にしてください。

「芸大の学生に伝えたかった芸術家として生きる技術」 執筆者：インゴ・ギュンター

(この部分につきましては、著作権法上の問題から掲載することができません。)

(出典) 国際情報サイト／新潮社 FORESIGHT／2007年4月号／カテゴリ：文化・歴史